
ライダーの世界がもしも一つだったら～ライダーワールド～

sinne-キヨノリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライダーの世界がもしも一つだつたら～ライダーワールド～

【Zコード】

Z8328Y

【作者名】

sinnne・キヨノリ

【あらすじ】

そもそも全てのライダーの世界が一つだつたら・・・。そんな作者の想像から生まれた小説です。主人公は誰がどう言おうと剣立カズマと辰巳シンジとかリイマジ。オリジの出番はリイマジと比べると少ないかもです。完全ギャグです。キャラ崩壊も含みます。結構ありがちな設定とか出ますが気にしないで下さい。

一話「カズマのストレス・鈴海姉弟の恐怖」（前書き）

カズマ「で、新小説始まつたけど・・・」

一真「どうしたんだ？」

カズマ「俺が最初から・・・」

一真「ま、それは見てのお楽しみだ」

ララ「なんか似たような小説あるかもしれないけど、これはもう本当に作者の妄想だからね～」

弟切「・・・」

一話「カズマのストレス・鈴海姉弟の恐怖」

彼は、其処に立っていた。

「はあ・・・。今日も遅刻かあ・・・」

青年、剣立カズマは溜息をついていた。

彼はBOARDという会社の社長（代理）。

最近夜が眠れないらしく、遅刻しがちである。

「カズマ。お前今日も遅刻か・・・」

カズマの先輩である菱形サクヤは言った。

「最近アイツらが煩くて眠れないんだよ」

「大丈夫か？」

「まあ、ね」

サクヤはカズマを心配している。

「お前は一応社長代理なんだぞ。ちゃんと健康管理とかしろよな」

「はいはい・・・はあ・・・」

彼はサクヤに言われながらも、溜息をついていた。それは、彼が住んでいる所の隣部屋の人物のせいなのだが・・・。その人物は、カズマの真後ろに居た。

「うあーーー！」

「おはようございますカズマさん！今日はソウジさんが社会科見学として僕とアスマを連れてきてくれたんです！」

「すみませんカズマさん。でも楽しそうだったので、昨日は眠れなかつたんです」

「よ、カズマ」

ワタルとアスマとソウジ。

ソウジは実家に住んでるので原因にはなってないのだが、この子供二人。アスマとワタルが昨日色々んちやん騒ぎをしていて眠れなかつたのである。

「おーまーえーらー」

「まあまあ、怒らなくて良いだろ？ 実際、一人は今日を楽しみにしてたんだからな」

ちなみに、見学予約はしつかりとつてある。だからこそ、カズマは余計イラついている。

「カズマ、アンデッドがでて！」「剣崎さんとムツキ行かせる、俺は社会科見学をしてる子供達の相手をしなくちゃならない」

「カズマ落ち着け！」

「俺は此処の社員じゃないぞ！」

サクヤの言葉にカズマはハツ当たりするよつて言つ。

ちなみに、ムツキはともかく、剣崎はBOARDに入り浸つてはいるし、プレイバックルはもつているが、BOARDの社員では無い為、ただとばつちりをくらつてゐるだけだ。

「じゃ、ソウジさん、この一人の子守は俺がしどくんで、ソウジさんはZECT見に行つててください。天道さんが何やらかすか分からませんし、弟切さんは弟切さんで貴方に誤解される事しそうですし、加賀美さんは加賀美さんで熱くなりすぎて色々ありますし。アラタさんも加賀美さんと一緒になつてやらかしそうですし、行つた方が良いと思いますよ」

カズマがZECTの心配をするも

「いや、俺も実はBOARDの中を見てみたかつたんだ。まあ、あつちは天道と弟切に任せるとからな。変な事やらかしたらアイツに制裁くらわせるつもりだしな」

「アイツって……。もしかして、鈴海ルルですか？それとも姉の方ですか？」

ソウジは笑つていつた。

「どつちもだ」

「それは逆らえないですね……」

カズマは苦笑いする。

* * * * *

所変わつてこちらは鳴海探偵事務所。

左翔太郎と園崎来人ことフイリップが事件の話をしていた。

「翔太郎、今日も事件だよ」

「何だ? 今度は」

フイリップは言つ。

「何だか、不審者つていうか、変な人が出るらしい。発見者の証言によれば、その人の顔は恐怖するほど恐ろしいらしい」

「誰だ?」

「うへん、証言によると、男性で、青い服を着ていて、青いバイクで……」

「分かつた……。剣立力ズマだる。アイツは、最近溜まつてるらしいからな」

「今日も、とばっちらりで剣崎さんとムツキがアンデッドの封印に行かされたって」

「お~お~、ムツキはともかく剣崎は社員じゃないだりつ……」

「顔出しだるしライダーになれるからって理由でらしき……」

「はあ……」

そのカズマの行動には、翔太郎も呆れていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

喫茶店兼宿泊場所のマリンチエリアには、鈴海ララとルルが居る。

「ド、ソウジさんにしてストップー頼まれたの？そのまま

「うん・・・断りきれなくて・・・」

「まあ、良いけど。じゃ、NECTに行くよ」

「うん」

二人は、NECTに行く事にした。

～NECT～

「てわけで、ソウジさんに頼まれて、何かやらかしたら私達が制裁
を下します」

ララは弟切ソウと天道総司と加賀美新とアラタに言っていた。
超絶の笑顔で。

「あ、ああ・・・」

弟切ソウはソウジに擬態したワームだ。
ララの使えそうだから生かしておいてとこいつ葉だけで生きれてい
るワームだ。

ララの言葉の力は多大で、ララに逆らつとまざい事があるという噂がある。

なので、弟切ソウはララに逆らえない。勿論、他の加賀美、天道などもだ。

「何かやらかしたら私の権限で弟切さんの命は無いと思つてください」

その笑顔は超怖い。ちなみに、彼女に悪気は無い。大事な事だからもう一度言つ、先ほどの彼女の言葉に悪気は無い。

天然Sなのだ。

なので、逆に弟切や天道は恐れている。

一体、これからこの世界で何が起つるのだろうか・・・?

続く

一話「カズマのストレス・鈴海姉弟の恐怖」（後書き）

ララ「あとがきは作者との対談！」

作者「はい」

ソウジ「鈴海最強伝説・・・」

作者「ララに質問！」

ララ「何？」

作者「ララって、皆の事どう呼んでるの？」

カズマ「作者なら其処分かれよ！」

ララ「えっと・・・

ユウスケ ユウスケ君

ワタル ワタル君

シンジ シンジ君

カズマ カズマ君

タクミ タクミ君

ショウイチ ショウイチさん

ソウジ ソウジさん

アスム アスム君

五代 五代さん

津上 津上さん

真司 城戸君

乾巧 巧さん

剣崎 剣崎さん

ヒビキ ヒビキさん

天道 総司君

野上 良太郎君

紅渡 渡さん

士 士君

左翔太郎 翔太郎君

フィリップ フィリップ君

映司 映司君

弦太朗 弦太朗君

だよ！」

カズマ「長い説明有難う！」

—1話「映司の苦労・子供達（+ソウジ）の社会科見学（前書き）

映司「一話で早速僕の身に何が……」

カズマ「さあ?」

タクミ「はあ……」

アスム「今日は師匠出しあげださこよ……」

ララ「今日は無理かも……」

「話「映画の苦労・子供達（+ソウジ）の社会科見学

子供一人と三十路は上機嫌だった。
ずっと気になっていたのだな。つ。
BOARDの中身が。

「 」

「子供達はともかく、ソウジさんは上機嫌にならないでください、
なんだか三十路の人がそんなことしてると正直引きます。えへつと、
こつちは情報管理室です。アンデッドについての情報がびっつしり
詰まつてたりするので、あまりこの中には入れないです」

「アスム！見てください！パソコンが沢山あります！」

「パソコン……ですか……？」あまり機械には慣れていない

「ふむ」

「で、こつちは訓練室です。まあ、特にムツキとか剣崎さんとか色々な人が入り浸っています」

訓練室にカズマが案内した、その行動が、駄目だったのかもしれない。
い。

「カズマさん！訓練ですか！？少しあらせてくれださい！」

と、アスムがこんな事を言い出したのだ。

「え？」

カズマは驚いた。鬼の修行をしてるとはいえ、こんな子供が大人のやるような訓練をするのは・・・と思つたのだ。

「大人と同じプログラムにしてください！」

「ほ・・・僕は遠慮します・・・」

「俺は・・・少しやつてみようか」

「という事で、何故か丁度悪いタイミングで帰つてきてしまった剣崎を巻き込んで、カズマもやる事になつてしまつた。」

「えへつと、じゃあ、かるへく説明します。まず、模擬戦をします」

「「じんだけリアルな訓練なんですかーー？」」

アスマと見物者のワタルが言った。

「なら、やらなくていいんだけど、アスマ」

「でもやりますー！」

「えつと、この機械の中に入つてやります。この機械は総て連動してるので、まあ、一度俺と剣崎さんとアスマとソウジさんで四人だから一対一で出来るね。剣崎さん」

物凄い笑顔でカズマが剣崎に言った。

剣崎は

（「イツ絶対それ分かって引き止めたな・・・！」
と思っていた。）

ちなみに、チーム分けは
アスム・ソウジ・カズマ・一真
になつた。

「準備はいいですか？じゃあ、レディ・・・ファイツ！」

「・・・・実況兼審判はワタル、解説は俺、相川始でやらせても
いい

『おい！』

意外な人物、始が居た事に剣崎は突っ込む。

「黙れケンジヤキ」

* ちなみに作者は始さんの性格分かってません

『というか、もう戦闘は始まっていますよ！』

「おーっとー余所見をしている剣崎さんにアスムが特攻を仕掛けて
きます！が！」

『つええええええええええ！』

『剣崎さんー危ない！』

「おーっとカズマさんが剣崎さんを助けに入った！解説の相川始さ
ん、これは一体どういう事でしょうか？」

「…………第三のジョーカー候補だな、アイツ」

「ちゃんと解説していくださー。」

* ちなみにこの小説では剣崎さんはジョーカー。相川さんもジョーカーという設定です。

ちなみに、カズマは全力で否定していたが。

『ふ、剣崎、隙あり!』

「おつと！此処で今まで何もしていなかつたソウジさんが剣崎さんに特攻していきました！」

『つていうか今の声は何だよー!』

「戦っていても全力で突っ込みをするカズマさん！解説の相川さん、これはそういう事でしょうか？」

「・・・・突つ込みとしての本能。体にしみこんでいるのか・・・」

「何ですかその言い方！？」

『つていうか社会科見学は何処行つた！』

『そんなのはもう宇宙の彼方に行きました！』

「アスムは少し自重してください！」

……（アイツ、本当にジミーかに出来るな……）

左又には何せかんやで金崎さん寺にてます。

* * * * *

翔太郎

「何だ?」ノイに「ジ

「アーリック」は相棒の翔太郎に言った

はあ

「アーティストの問題」

おみくじでくわくわく

翔太郎は映司を椅子に座らせる。

「で、何だ？ 映司」

「あ、ああ・・・。実はな・・・」

映司は一息ついていった。

「アンクが夜中ずっと煩くて寝れないんだ。そして、外に出たかと思うと、ヘマをするガメル、ウヴァ、カザリ、メズールに毎回出会いつてフォローして、アンクがアイスアイスうるさくて、拳句の果てに飛ばされてきた弟切さんにぶつかって・・・」

「・・・・・。よし、ララの所に泊めてもらえ、あそこなら安全だしな」

「アンクには、僕たちから言つておくれ」

「うん・・・頼む・・・」

続く

一話「映司の苦勞・子供達（+ソウジ）の社会科見学（後書き）

意外に社会科見学の話が・・・。

飛ばされてきた弟切・・・。多分ララに飛ばされたんだと思います。
何かへマして。それかソウジさんにやられたか、加賀美に巻き込まれたか、天道に振り回されたか。

では、また次回お会いしましょう！

二話「社会科見学終了・天道総司対鈴海ルル（前書き）

カズマ「社会科見学に結構時間使ってるよな・・・」

ユウスケ「・・・」

ルル「それにしても、まだあまり「コツチの様子が出てないな・・・」

ララ「だから今回でるんだよー」

三話「社会科見学終了・天道総司対鈴海ルル

「えっと・・・。じゃあ、次は・・・」

「僕、社員食堂に行つてみたいですー!」

カズマの言葉を遮つてワタルが言った。

「へ? 何で?」

「だつて、どんなとことか見てみたいんですよー!」

「あ、僕も見てみたいですよー! それに、土壠さんと師匠がはじめてあつた場所ですし!」

「は・・・はあ・・・。ソウジさん、剣崎さん。其処で良いですか?」

「ああ」

「良いけど・・・。でか俺も一緒に行く前提なのかよー!」

何気に巻き込まれてる剣崎はともかく・・・一行は社員食堂に行く事となつた。

「・・・、アソマトイ、剣崎さん」

「・・・、頑張れよ、剣崎」

ちなみに、陰からムツキとサクヤ、それに何故か橘も剣崎を見守っていた。

「じゃ、NECのみなさん ちゃんと仕事をしてくださいね！」

「したこと繕める」

「ある意味恐怖だな・・・」

「俺は誰からの指示も受けない。俺は俺の道を行くだけだ」

天道、この二人には逆らうたら駄目だな……はあ……」

「加賀美は大丈夫だと思うが、だつて、一応、トップの『子息なん
だしさ・・・』

セクトルーバーの皆さん、弟切、天道、加賀美、アラタの順番で喋っている。

ちなみは、加賀美の父がこの町のトコな為、本当にハハとハハは最初から加賀美に手出しそうなつもりは無い。

「じゃあ、最初は訓練しましょう」

「・・・・・あの・・・・・ソウジからの・・・・・言葉なんだ・・・・・。逆らつたら・・・・まず弟切は・・・・・無事じや済まないつて・・・・・分かつてるよな・・・・・。クロックアップして・・・・・。ボコつて・・

・くるかも・・・

！」

「いや、ルル。ソウジさんはそんな事しないって・・・」

「冗談だよ……」

ルルの言葉に、弟切は冗談じやない気がしつつ、訓練をする事にした。

・・・・・ララちゃん、ルル君・・・居る・・・?」

「あ、映司君。どうしたの？元気ないけど」

「元気がない」というか・・・生気が無いに近い・・・」

半分死にかけの映司がテテ達の所へ来た。

「大丈夫！？」

「何だよその咳のしかた！」

ララが心配する横で加賀美が映司の咳に突っ込む。

「じゃあ……私達の家に泊まる？　あの人達には私から言つておくから。彼等には煩くしたら駄目つてきつ～く言つておくか」「ひ

「うん……あり……が……と……」

「おー、おれー。おーしゃーるー。」

バタン。

映司はつこに倒れた。

ちなみに、ラーラヒルルがその場を離れた為、サボっていたら制裁するという条件付きで各自仕事をする事となつた。

一方、BOARDでは、意味不明の料理対決が始まつていた。
それまでの経緯は……。

『お、ソウジ』

『ん、津上か、何故お前が此処に居る?』

『ああ、実は、何回か此処で見てるんだよ。社員食堂の料理とか色々

々

『成る程な

』で、ソウジ。お前におでん対決を申し込みたいんだ』

『ああ、いいが』

という事で、おでん対決・・・もとい、料理対決が始まつたのであつた。

「俺達を無視して話を進めるな————！」

カズマの渾身の突込みが入る。

「まあ、良いじゃないですか。僕達も一度お腹が空いてきた頃ですし

「はあ・・・分かったよ」

「よし、行こう、ソウジ」

「何処からでも掛かつて来い」

「よーいつスタート！」

そして、数十分後

「はい、これが俺のおでんだ」

「天堂屋の伝統のおでんだ。具が少ないとか言つなよ

～色々すつとかばして結果発表～

「で、結果は？」

「…………ソウジさん」「…………ソウジからの気迫が凄かつた

「はあ……なあ、もう帰つて良いか?気付いたらもう帰る時間なんだが……」「

「あ、確かにそうですね。僕たちもう帰ります」

そして、社会科見学は終わったのだ。最も、数人は被害にあつたようだが。

「…………広瀬さん」

「どうしたの?剣崎君」

「…………俺、疲れました…………」

「…………」

「あ、カズマ君、アスマ君、ワタル君。お帰り。で、ごめんけど、今夜はあまり騒がないでね」

「何ですか?」

「今日は、映司君を泊めてるの。だ、いぶつかれてるようだったから、静かにしてね」

「…………」

続
<

二話「社会科見学終了・天道総司対鈴海ルル（後書き）

ララ「ちなみに、カズマ君達三人は私の家に泊まってるの」「
ルル「カズマが保護者代わりなんだってさ」「
カズマ「あと一人泊まってるの。まあ、言わないけど、まだ」「
ララ「じゃ、時間が無いからさいなら」「

四話「シンジの出勤・w龍騎の恐怖（前書き）

シンジ「サブタイトル考えた奴ぼいる」

真司「・・・」

リュウガ『・・・』

* 本作品にはリュウガも登場するっぽいです（作者はリュウガについて大して知識はないです=無謀）

四話「シンジの出勤・w龍騎の恐怖

「遅れる――――――」

青年、辰巳シンジは、急いで出勤していた。

彼はバイクを持っていない為、無論、全力疾走だ。

「あ～もう一あいつら騒ぐなって言われてたのにまた騒いで！あの三人怒らせたら後が無いって分かってるだろ！」

「シンジ～」

「カズマ～」

全力疾走するシンジの横を、ブルースペイダーに乗ったカズマが通りかかる。

「今かまってる暇は無いんだ！僕は行くからな！」

「なら、俺が連れてつてやるよ

「いいのかー？」

「ああ、幼馴染のよしみとしてな」

* この小説ではリイマジ組は年齢が近い人たちは大体幼馴染という設定です。

例えばショウイチとソウジ、カズマとシンジとユウスケとタクミ、アスムとワタルとタクミ。

タクミの名前が一つ挙がってる理由はいこません。

「じゃ、ありがたく！」

そして、シンジはカズマに乗せて行って貰つた。

此処はATTASHIジャーナル。辰巳シンジの働いてる場所である。

「レンせーん！遅れてすみません！」

「ああ、シンジか

彼は羽黒レン。辰巳シンジのパートナーである。
「うわー、ホモとか言つんじゃない、ヤンデレとか言つんじゃない。

「どうしたんだ？遅れるなんてお前らしくないな。ま、行くぞ」

「はーー！」

「はー、今日は休みかー

城戸真司はORANGEジャーナルといつといつで働いてる、だが、今日は特別休暇を貰つて暇にしている。

現在、ブラブラとしている。

「あ、城戸さん」

「あ、えっと・・・。シンジの幼馴染の一人の・・・」

「小野寺ユウスケです」

「あ、そうそう。で、どうしたんですか？」

* ちなみに作者は龍騎未視聴の為、城戸さんの性格これで良いのか
分かりません・・・。

「いえ、なんでもないです。見かけただけなので」

「あ・・・はあ・・・」

そう言つてユウスケは去つて行つてしまつた。

一
体、なんだつたんだろう・・・

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

「ふ、今田も取材終わつた」

一ノノシ

「あ、何ですか？レンさん」

「今日はもう帰つて良いぞ。城戸は今日特別休暇で暇してゐるからな、相手してやれ」

「はい」

* * * * *

一
モルモット
七

遠くから辰田シンジが走ってくる。

「あ、シンシン、エーフたんだ？」

レンさんか坂戸さんか瞬してるから相手してやれって

卷之三

マリンモニリア行を出すか?」

城戸はそう思いながらも、辰巳シンジに連れられてマリンチエリアに来た。

「あ、シンジ君おかえり～」

「城戸 い ら つ し ゃ い 」

「相変わらずルル君は無愛想だな」

城戸は苦笑いしつつ席に着く。

「あれ？いつも居るアスム君とワタル君は？」

「アーティラに制裁を下されてる途中だよ」

「うわあやんがそう言つて、よ~く耳を澄ましたみると。・・・。

「あ、やめてくださいー！ 映司さん！ 田を覚ましてくださいー！」

「おんなさい！ もうおせんから！ もう夜に黙れおせんから～！

「つてこいつで」

「「つていう事でで済む問題じゃないだろー。」

「シンジは突っ込んでいた。

「子供に何してんだあの人！」

一人は思わずその場所まで走っていた。

「映同一やむろー。」

「子供に何してるんだ！」

「俺様の眼力を妨げる者はあ、誰一人としてゆるさねえ……」

「… もう、誰だよアントナ！」

二人は
畠舎を止めるにはこれしかないと
葵臭していた

ソシ落ち着こんだ

「アスマ君達は仮面ライダーとはいえまだ子供・・・子供にお前は何してんのうつなあ・・・」

咲はその鳥を見て知るのだった

▼龍騎を怒らせた罷を

! ! ! ! ! ! ! ! ! !

続
<

四話「シンジの出勤・w龍騎の恐怖（後書き）

ララ「映司君の受難？」

ルル「映司が怒るのも仕方ない」

映司「何あれ龍騎怖い龍騎が怖すぎてどうじょもなー・・・」

ブツブツ

五話「仮面ライダーの活用性・一いつの学校」(前書き)

ララ「前回できなかつた関係図です・・・」

ルル「超脇役とかはまた今度」

リイマジ

小野寺ユウスケ

友達・・・五代雄介・城戸真司・剣崎一真・門矢士・ワタル・辰巳
シンジ・剣立カズマ・尾上タクミ・アスム・如月弦太朗

ワタル

友達・・・紅渡・左翔太郎・小野寺ユウスケ・アスム・尾上タクミ

辰巳シンジ

友達・・・城戸真司・乾巧・剣崎一真・野上良太郎・小野寺ユウス
ケ・剣立カズマ・尾上タクミ・如月弦太朗・鈴海ララ・鈴海ルル

剣立カズマ

友達・・・城戸真司・乾巧・剣崎一真・野上良太郎・紅渡・小野寺
ユウスケ・辰巳シンジ・尾上タクミ・門矢士・如月弦太朗・鈴海ラ
ラ・鈴海ルル

尾上タクミ

友達・・・乾巧・安達明日夢・野上良太郎・野上幸太郎・如月弦太
朗・鈴海ララ・鈴海ルル

芦河ショウウイチ

友達・・・五代雄介・津上翔一・ヒビキ・天道総司・ソウジ

ソウジ

友達・・・五代雄介・津上翔一・ヒビキ・天道総司・芦河ショウウイチ

アスム

友達・・・安達明日夢・小野寺ユウスケ・ワタル・左翔太郎

* 海東は師匠

五話「仮面ライダーの活用性・一つの学校」

「」辺には、高校が一つある。

青色の制服の天ノ川学園高校。通称天高。

灰色の制服のスマートブレイン高校。通称・・・何だっけ？
まあ、とりあえず、この一つの高校は、もう合併しろよ、って言つ
くらいに仲が良い高校。

この人達もまた、結構仲が良いのである・・・。

「タクミー・よ・」

「あ、弦太朗君」

如月弦太朗と尾上タクミ。この二人は、同じ仮面ライダーというの
とか色々で仲良くなつた二人組である。

「弦太朗君、どうしたの？」

「いや、ちと、手伝つて欲しい事があるんだ」

「？」

弦太朗に言われるまま、タクミは弦太朗についていった。

そして、タクミが着いた場所は・・・。

「で、何なの？皆集まつてるけど・・・」

皆集まつてゐる……とは、平成ライダーの面々（+）が集まつてゐるのだ。

「あ、タクミ」

「カズマさん、これ、何ですか？」

「これはな、平成ライダー（+）で仮面ライダーの活用性について話してゐるんだ」

「で、タクミが555をどのように活用してゐるか聞きたくて、ついつい俺が連れてきちまつたんだ」

「はあ……。555をそんな風に使つわけ無いじゃん……」

（でも、555のファイズエッジって、結構警棒に使つてベタなネタがあるんだよね……。僕はしないけど……）

そんなことを思いながら、タクミは、弦太朗の方を見て言つ。

「そういえば、弦太朗君は、フォーゼを何に使つた事があるの？戦い以外で」

「俺は……特に、無いな」

「でしょ？そりゃ、あまり使わないので……」

タクミがそう思つてるとコウスケたちが話してゐる辺りでこんな会話を聞いてしまつた。

「コウスケはさ、クウガ何に使った事がある？」

カズマが、コウスケに聞いた。

「ん~、俺は、あねさんに格好つけようと、クウガに変身してバイクで出勤した事がある。すぐ怒られたけど」

「何だその馬鹿な使い方！」

「そういうカズマも、馬鹿な事に使ってるんじゃないかな~」

カズマの言葉に、シンジが訊く。

「俺は・・・無いな」

「え~、ベタなブレイライザーで料理作るとか無いのかよ~」

「シンジだって、何か使ってるのかよ」

「う~ん、僕は・・・」

その後、馬鹿馬鹿し過ぎる返答が返ってきて来た。

「レンさんの居る場所に行く為に龍騎に変身してミラーワールド入つてレンさんの居る場所の近くの鏡に移動した事がある。城戸さんにお会い時も同じような事を使ったことがある」

「・・・シンジ・・・」

「それは・・・無いな・・・」

「コウスケさんも、シンジさんも馬鹿馬鹿しそぎますよ・・・」

「あ、タクミ」

我慢の限界だったのか。突っ込まずに入られなかつたのか、タクミは会話に割つて入つていた。

「タクミは・・・やつを無いって言つてたが、シマンネ~」

「もし使つたとしてもシンジさんとかコウスケさんとかと同じようには使いませんよ・・・。それに、移動とかならオートバジンがありますし」

「良いよな~。三人はバイクあつて・・・」

「あ・・・」

そうだ、ディケイド本編で、コウスケ、カズマ、タクミは、ちゃんとバイクがあるという描寫があつたのだ。
でも、それ以外のリイマジには、バイクがあるといつ描寫は無かつた。

まあ、子供二名は仕方ないが。

「一哥ライダー的 existence である海東にバイクが無いのに、この二人にはちゃんと、バイクがあるよな~」

「やめて・・・やめてくれ!シンジ!カズマ、シンジを止めてくれ!」このままだとバイクが無いというだけで地獄兄弟の仲間になつて

しまつー！」

「それだけは嫌だ！」

「何やつてるんですか・・・ばかばかしい・・・」

子供のワタルにまで、こんな事を言われる始末だった。

（どうしよう・・・僕も、実は料理する時にザンバットソード使つたんだよね・・・）

（それ・・・ワタルもベタですね・・・。ちなみに、僕は音撃棒で普通に太鼓演奏しましたよ）

（それ・・・普通の使い方だね・・・）

ちなみに、上から順にワタル、アスム、タクミである。

つづく

五話「仮面ライダーの活用性・一つの学校」(後書き)

ララ「オリジの人たちで～す」

オリジ

五代雄介

友達・・・津上翔一・ヒビキ・小野寺ユウスケ・芦河ショウイチ・ソウジ・フィリップ

津上翔一

城戸真司

友達・・・五代雄介・ヒビキ・天道総司・芦河ショウイチ・ソウジ
ズマ・左翔太郎・火野映司

乾巧

友達・・・城戸真司・剣崎一真・野上良太郎ほうとうけないじょうじょう・紅渡・尾上タクミ・
辰巳シンジ・剣立力ズマ・フィリップ(いつのまにかつるんでた)

剣崎一真

友達・・・城戸真司・乾巧・紅渡・門矢士(友達と言つより会う度
喧嘩してゐる)・小野寺ユウスケ・辰巳シンジ・剣立力ズマ・左翔太郎

ヒビキ

友達・・・五代雄介・津上翔一・相川始（何でだろう・・・？）・
芦河ショウウイチ（こらそこ、映画で共演してたとか言うんじゃない、
キラメキとか言うじゃない）・ソウジ

安達明日夢

友達・・・アスム・アスム・尾上タクミ・如月弦太朗

天道総司

友達・・・津上翔一・野上良太郎（何故・・・）・門矢士（妹居る
同士、仲良くな）・ソウジ・芦河ショウウイチ・フィリップ（友達と
言つより付き纏われている）・鈴海ララ

野上良太郎

友達・・・乾巧・天道総司・紅渡・剣立カズマ・辰巳シンジ・尾上
タクミ・火野映司・如月弦太朗

紅渡

友達・・・乾巧・剣崎一真・野上良太郎・ワタル・剣立カズマ・門
矢士（会つ度喧嘩してる）・フィリップ・火野映司

門矢士

友達・・・剣崎一真・天道総司・紅渡・小野寺ユウスケ・剣立カズ

マ・左翔太郎

左翔太郎

友達・・・城戸真司・剣崎一真・門矢士・アスム・ワタル（なつか
れてた）・フイリップ・火野映司・如月弦太朗

フイリップ

友達・・・五代雄介・乾巧・天道総司・紅渡・左翔太郎・火野映司・
後藤さん

火野映司

友達・・・城戸真司・野上良太郎・紅渡・左翔太郎・フイリップ・
如月弦太朗

如月弦太朗

友達・・・安達明日夢・野上良太郎・剣立カズマ・辰巳シンジ・尾
上タクミ・小野寺ユウスケ・火野映司

ララ「です！」

六話「カズマの暴走・それ違つ番組（前書き）

ララ「・・・」

士「大体分かつた。風m「はいネタバレ禁止！」

カズマ

六話「カズマの暴走・それ違う番組

一 は あ

溜息をつく間に
たすねる川川

ああ 何か 酒呑みたしなあ ・・・・・ 二で

111

突然の二三の言葉は
川川は何が分かぬなかつた

「てわけで！飲み会しよう！」

——突然過ぎるわ！――！」

テテの言葉にユウスケ、カズマ、タケミ、巧が突っ込む。

一會場は此處、「マリンモーリア！」でか今から出でましょ！」

「……………」

自重しないララに、先程の四人が突っ込む。

「でも、まあ、良いんじゃね？僕も最近やりたかつたし、リイマジ
とオリジ集まって」「

辰巳シンジが言った。

「シノジ君ノコ良二。ナニ、ジヤあエリハナリシナウ。」

と言つ事で、強引な飲み会が始まつたのである。

「で、僕達未成年組はジュースですか」

「あれ? ララさん? 」ハヤシヤないんですか?」

ふえ?えっと・・・私はお酒のみたいになつて

*未成年の飲酒は禁止されています

駄馬!! やんは未成年でしょ」

カズマがララをタクミ達の所へ連れ戻す。

一
あ
・
・
・
「

その時、ユウスケは違和感と微妙に慣れた気配を感じた。

「まったく、あ、ユウスケ君。一緒に飲もう！」

「はあ！？」

カズマが、完全に酔っている。

「お前酔つのお前昔からだけど早つ…」

「ほらほら、ユウスケ君もモタモタしてたらなくなるよ~」

といふが、カズマは少々^{露羅化}している…。

「カズマさん、一体どうしたんですか?」

「どうもしないよ」

「いやいやいや……どうかしてるつて!」

「ああ?」 某三歳の様な低い声で言つ

「「「今度はそれかよ!……!」」

先程の四人からカズマを引いた三人が言つ。

「大体分かつた。カズマは酔うと中の人の他のキャラになるんだ!」

士が今までのカズマの行動で分かつた事を言つ。

「確かに……最もですね……」

タクミが士の言葉に同意する。

「つていうか……何処から……あの声……出して……る

んだろう・・・

ルルが、先程のカズマの行動で疑問に思つた事を口に出していた。

「ん? あれ、えっと……昨日……何があつたんつだつけ?」

「あ、カズマ君、起きた？」

「あ、ララ。えっと、昨日何があつたんだっけな」

「昨日は此処で飲み会したよ？その時にカズマ君が暴走して・・・」

あ
！」

カズマは思い出したように言う。

俺・・・実は酔うと何か性格変わるって言ってなかつた・・・」

?

ルルは疑問符を頭に浮かべている。

「何かさ、シンジとユウスケに聞いたんだけど、俺昔から酔うと何か、性格がコロコロ変わるって言われてんだよ」

「・・・・成る程な・・・・」

（つていうか、中の人の別の仕事とか、そういうのだけど・・・）

「ふああ～。う～、まだ眠いな～」

「ララは、眠たそうに欠伸する。

「うわあっ！」

「・・・！？」

「どうしたの？カズマ君」

「何か炎出せた！」

「「それ別の番組！」」

六話「カズマの暴走・それ違つ番組（後書き）

ララ「今回の話は作者が風魔の小次郎見てやりたくなつたネタです」
カズマ「最後の小ネタはパツと思いついたものだからな〜」
ルル「・・・・パツとすぎ・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8328y/>

ライダーの世界がもしも一つだったら～ライダーワールド～

2011年12月1日19時50分発行